

なにわ たいむず

No.120

contents

- 01 news / 管理者うるしまのヨモヤマバナシ
- 02 ももさんの日々あれこれ
- 03 グラマエダノアトリエナニワ
- 04 Case Book
- 06 シムインのいけのなんでも日記
サポータークラブ
- 07 スタッフ紹介

毎年恒例の夏祭りを開きました！

季節はすっかり秋、朝晩は冷え込む日もでてきましたが、この夏に開催しました夏祭りの「報告です」

8月の半ばに、夏祭り・花火大会・かき氷大会を開催しました。例年、花火大会はライフサポートなわの入所利用者さんが楽しんでおられたのですが、今年はグループホームの利用者さんも参加され、いつもより大勢で楽しむ夏祭りとなりました！

「ここ数年、恒例行事となっていることもあり、利用者さんたちも「暑くなってきたし、今年もそろそろ…」と楽しみにしてくださいっているかもしれません。四季を感じられる行事ごとがあるというのは、とっても大事なことだなと思います。現場スタッフのみんな、準備と当日の対応、お疲れ様でした」

(小池)



NEWS

「子育て支援講座」の報告

こちらも毎年の恒例となっております、角田みずさんの「子育て支援講座」を9月4日(金)アゼリア柏原で開催しました！昨年度は台風が近づく悪天候、そして今年も大雨。雨男なんだろうが、いやここ一番では結構晴れを呼んできたのに…などと思いつつも、無事開催することができました。

今回は、13名(内部を合わせると25名)の方に「参加いただきました。毎年参加してくださっている方もおられ、午後からの懇親会はさながら同窓会のような雰囲気です」

僕自身は事務員として働かせて頂いており、利用者さんと接することは多くありません。なので、「支援者として」というよりは、「(3人の子どもの親として)、角田さんのお話を伺うことが多いです。」「相手をみくびらない謙虚さ」、角田さんのお話によく出てくる言葉です。こちらが「よくわからずにやっているんだろうな」というような気持ちで接していると、自閉症の方も、小さな子どももやる気を失ってしまうと思います。目の前の方が大切にしている世界に尊敬の念をもつこと、大事にしていきたいです。

(小池)

管理者のまの

支援現場で必要な力

昨今、地震や台風、大雨などによる自然災害のニュースが後を絶ちません。7月末の熊本地震では、全国社会福祉協議会からの支援要請を受け、法人を代表して前田理事長が熊本へ向かいました(相変わらずのフットワークの良さに脱帽です)。被災された方々の健康と、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

NEWSでも載せていますが、9月に毎年恒例となった角田さんの講演を行いました。昼からは懇親会として十名ほどのご家族・支援者が集まり、子どものことや仕事のこと、自分自身のことを話す場となりました。「この場の話は「こだけのもの」がルールの一つであり、皆さんに内容をお伝えすることはできませんが、一人ひとりが自分の話をする中で、気持ちが整理され、勇気づけられる瞬間がありました。一人の支援者として、そういった瞬間に立ち会えたことが何よりも幸福でした。参加された皆さん、ありがとうございました。」

この数年、自分自身が講演をしたり、他事業所へコンサルに行く機会が増えました。近年は『標準的な支援』が叫ばれており、構造化やABAを軸とした支援が広まりつつあることを実感します。それらの支援方法は非常に有効であることは言うまでもありませんが、実際はうまくいかないことも多々あります。そうした矛盾の中、あらためて現場に必要なことを考える中で、『現場で考え続ける力』が核心ではないかと考えるようになりました。特定の支援スキルを身につけるだけでなく、『仮説→検証→結果→考察』を繰り返すことができる現場を醸成することができると否かが、専門性を維持するポイントであると感じたりする今日この頃です。

9月に、なにわの里開所当時の利用者さんが、他施設へ移行されました。身体機能の低下が顕著となり、こちらの施設では本人のケアが十分でないことが理由です。送り出す我々は、本人がいなくなることをさみしく感じていたのですが、本人は移行をどこまで理解していたかわからないものの、普段と変わらぬ様子で車に乗って行かれました。その姿に、逞しさや生命力、気高さを感じました。移行先でも自分らしく元気で過ごしてほしいと思います。

ヨモヤマパナシ



食卓で息子に用意させられる食べ物

夏になるとおいしくなるトマト、レタス、キュウリ、すいかは苦手で食べられない息子ですが、アイスクリームとそうめんは大好きです。

アイスクリームは年中大好きな食べ物です。

そうめんを食べるときは決まって、自分で冷蔵庫からねぎを取り出し、用意してくれます。そうめんにはねぎが欠かせないそうです(笑)。ちなみに、うどんには必ず一味、わかめ、油揚げ、ねぎを入れてくれと頼まれます(o^ー^o)。料理に添えてほしい決まった食材があるみたいです(笑)。

家では何か料理をすると息子はお皿を家族分用意し、自分のご飯をパパッと平らげ、私のお皿の料理をちらちら見ながら何かもらえないかと訴えがきます。食事を終えた後は洗い場に食器を全部もっていってくれ、食器洗いを観察して、終わると棚の元の場所に戻してくれます。

食事のルーティンができている息子です！！

by 匿名希望

担当者コメント欄

(季節は冬に差し掛かるかという時期ですが、作成が夏の終わりということもあり、このテーマになりました) 夏は冷たい料理やスイーツがより美味しく感じる季節ですね！お話を聞いていると、なんだか暑さが和らぎました😊冷たい物を食べて、暑い夏も乗り越えられたらと思います♪インタビューさせていただき、ありがとうございました！！

(吉岡(明)・鬼頭)



今回のテーマ

夏によく食べる物



お母さんの 日々あれこれ

お母さんが日々感じていることを
ちょっとだけ垣間見るコーナーです



大好きだった甘い食べ物...

夏によく食べるものは冷たいスイーツです。毎年ブームがあり、その年によって種類が変わります。かき氷にはまっていた時期は、毎日のように娘と一緒にかき氷を作って食べたことを思い出します。

昨年の夏はアイスの実をよく食べていましたが、今年の夏はまったく食べなくなりました。というのも、毎月娘が歯医者に通っているのですが、今年の春に2ヶ月連続で虫歯になってしまい、娘にとってその治療がトラウマになってしまったからです。歯医者さんに「砂糖をとりすぎないように」と言われてから、チョコやグミなどのお菓子が大好きだった娘が、甘い食べ物を食べなくなりました。それから虫歯ができていないことは良いことなのですが、困っているのがお誕生日です。5月に私(母)の誕生日だったのですが、家族も気を遣ってケーキを食べられませんでした💧

いつかまた一緒に甘いスイーツを食べられる日が来るといいな...と思っています。

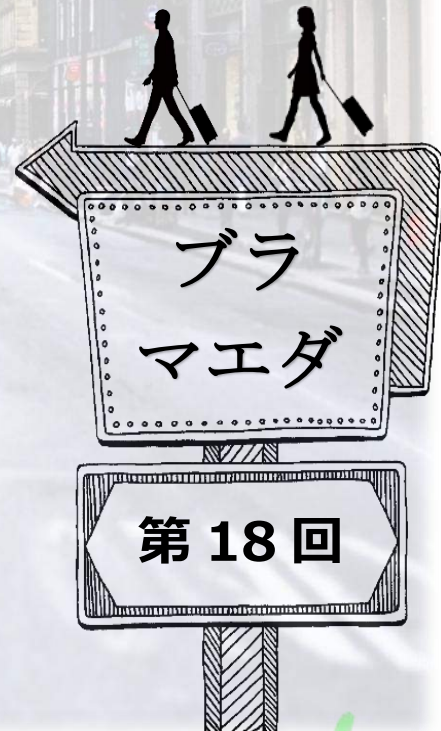
By ゆいひま



理事長マエダが、ブラブラするコーナーです



関西福祉科学大学
加藤 美朗 先生



今回は 法人の評議員・支援コンサルタントでもある加藤先生をブラブラと訪ねました

マエダ 「福祉・教育両面での実践、知見に深い先生ですが、そのルーツはどこにあるのでしょうか」

加藤先生「やんちゃな中学や支援学校の教員時代に、目の前の生徒の課題に向き合い、分らないことは調べて実践する。一人ではできないことは、相手が福祉であろうが、企業の人であろうが教えるを請い、助けをもらう。気づいたらその輪が広がっていた。そんな積み重ねかもしれませんね」

マエダ 「学校教育の枠外。一生涯さんの個別教育の延長線上にあるソーシャルワークの実践ですね」

加藤先生「当時は難しいことは考えていませんが、振り返ればそうかもしれませんね。ただ『枠を知る』ということとは意識していたと思います。様々な立場、寄つて立つところの違いを知ることが、相互理解と協力関係につながる事があつたと思います。最後は一生徒が中心にですが」

マエダ 「今後の野望等はあるのでしょうか」

加藤先生「研究職も一線は引いたので、皆さんのような支援者といつしよに、一当事者に向き合う時間を増やしたいと思っています。基本、オタクなんです(笑)。様々な当事者の方のことを知りたい。専門分野でもある行動分析で貢献できればと思っています。巷では標準的な支援の枠の中で、という風潮もありますが、行動分析だけに縛られずに、とも、思っています」

マエダ 「最後になにわの里スタッフにエールをお願いします」

加藤先生「皆さん一生懸命でマジメ過ぎ(笑)。モノは考えようです。専門的に言えば認知変容が重要です。悩むことも多々あると思いますが、視点を変えていかに楽しむか。当事者といつしよに、もつと笑って、楽しんで支援に取り組んだらよいと思います。笑う門には福来るです」

今回も、超コンパクト版でした。加藤先生、引き続き、いつしよに、楽しく・よろしくお願いします。

アトリエナニワ

なにわの里で使用している自立課題や
支援ツールを紹介するコーナー

【ツールの説明】

- ・ 休日に飲む飲み物を本人が自分で選択できるようにするためのツールです♪

【ツールのメリット】

- ・ 本人の「自分で選ぶ」機会を作ることができる。
- ・ 飲み物を具体的に提示することで、本人がイメージしやすくなる。
- ・ 「自分で選んだものを飲む」という経験が、自己決定の経験につながる。

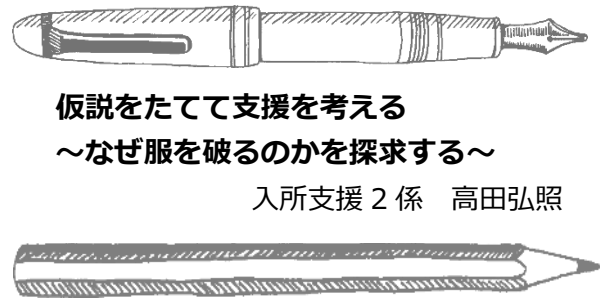
『 飲み物を選ぶ際のチョイスボード 』



- ①施設内の自販機に飲み物を買に行く、②ジョア
- ③ミルミル 3つの選択肢から選ぶことができます

Case book

なにわの里 支援の実践紹介



仮説をたてて支援を考える
～なぜ服を破るのかを探求する～

入所支援 2 係 高田弘照

【はじめに】

A さんにはある困りごとがあります。それは、着ている衣類を破ってしまうことです。過去にも、様々な支援をしてきました。その一例として、本人の好む素材の衣類を探し着てもらうことや、場面ごとに衣類を着替えてもらい、活動と着る服を結び付けること。「破らなければ報酬としてお菓子がもらえる」といったトークンエコノミーを使った支援なども試しました。一時的には服破りの回数が減少するものの、しばらく続けると回数が増えてくることを繰り返していました。

A さんは、ライフサポートなにわを約 20 年利用している知的障害を伴う自閉症の 50 代男性の方です。日中活動では、手先が器用で糸を編んでミサンガを作っています。居室ではテレビゲームをして過ごされています。文字の理解があり、ひらがなで書かれた文章が読めます。

【今回の支援の経緯】

A さんは、朝の起床時、夕食前後などに着ている服を破る行動が 2026 年 4 月頃から月 10 回以上、多い時は一日に 3 回ありました。「手持ち無沙汰な時間に衣類を破ってしまうのではないか」と考え、空いた時間にテレビゲームを提供したり、着替えのタイミングを増やしたりいろいろ支援をしてきましたが、うまくいきませんでした。そこで今回、チームを作り新しく支援を考えました。

【仮説を立てて考える】

なぜ破衣行為をするのか？仮説を立てて考えました。「衣類が汚れていて嫌で破くのでは？」「次の活動まで待てなくて破くのでは？」「衣類が飽きて新しい衣類が欲しいから破くのでは？」など様々な仮説が考えられました。チームで話し合いを重ねる中で、服を破った頻度の記録を見返したときに、対応するスタッフによって破衣行為の回数に変化があることに気づきました。A さんとの関係性が薄い新人スタッフが対応しているときに破衣行為の回数が多かったのです。『関係性が薄いスタッフが対応しているときに生じる不安感を解消したい』という情動があると推察しました。『気持ちを落ち着かせるために破衣行為に至っているのでは』という仮説に焦点をあて、支援を構築しました。

【目的】

破衣行為を別の“気持ちを落ち着かせるための行動”に置き換えることで、身につけている衣類を破る行為を減らす。

【支援方法】

2 つの方法で取り組みました。

1. イラストで視覚的に指示する。
2. 「ぬのちぎり」の活動を導入する。



図1 視覚指示のイラスト

「ぬのちぎり」の活動とは・・・

- ・ 本人が以前から使っているスケジュールに「ぬのちぎり」の活動を追加する。
- ・ 支援者が用意した布を、A さんが見本の大きさ（次ページ写真 2 参照）に手で裁断する。
- ・ 朝の一番破衣行為が多い時間帯の 6:00 頃に活動に取り組んでもらう。
- ・ 活動場所は居室内のプレイエリアに限定する。
- ・ 破っていい布が入ったカゴと破り終えた布を入れるカゴの 2 つをプレイエリアで管理する。

【活動のおおまかな流れ】

- ① 6:15 になるとプレイエリアに A さん自ら移動します。
- ② バランスボールに座り、布を見本の大きさ程度に手で裁断します。裁断した布は破り終えた布を入れるカゴに入れます。(時間：15 分タイマーをセット)
- ③ タイマーがなった後はスタッフが声をかけ、そこで活動を中断してもらいます。
- ④ 活動が終わったらテレビまたはゲームをしながら普段通り過ごしてもらいます。

※ 活動以外でも布を破るのは OK とし、制止する必要は無しとしました。

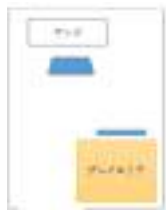


図1 部屋のレイアウト



写真1 めのちぎりの活動の様子



写真2 大きさの見本



写真3 フィニッシュボックスなど

【結果】

以前から記録をつけていた破衣行為の回数(4月～支援開始前日の7月12日までの頻度)を比較対象として、1か月ごとの破衣行為の回数が減っているかで効果を検証しました。Aさんは毎日時間になったら自発的に「めのちぎり」をするためにプレイエリアに行っていました。スケジュールで提示している時間以外にも、自らプレイエリアに移動してタイマーをつけて取り組んでいました。写真4のように、“布をちぎる(破る)”というよりも“糸にして丸める”ことが見られました。破衣行為の主な目的は糸にして丸めることであり、本人なりに気持ちが落ち着かせるための行動なのではないかと思われました。

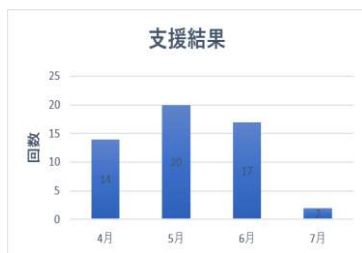
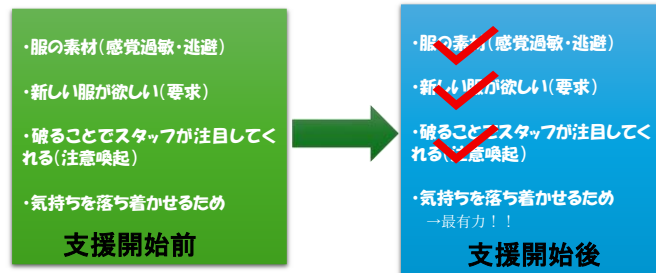


写真4 糸に丸めているところ

【結果からわかったこと】

支援期間中、夕方以降の服破りはありませんでした。平均して1日あたり約0.06回の頻度に減っていました。支援開始前は、本人の困りごとを絞ることができませんでした。支援を通して実施後の破衣行為の回数が減ったことで、今回の仮説(Aさんが気持ちを落ち着かせるために破衣行為に至っている)の優位性と併せて可能性が低い仮説も見えてきました。支援期間中は服を破らずに持続して着ることができており、破衣行為に至るAさんの動機(Aさんの行動機能)がつかめてきたのです(右図参照)。『服の素材』『新しい服が欲しい』『破ることでスタッフが注目してくれる』という機能は、本支援の内容では満たすことができません。本支援によって破衣行為の回数が減ったということは、上記3つの仮説は極めて可能性が低いと考えられます。『気持ちを落ち着かせるために破衣行為に至っている』という仮説が優位だと結論付けました。そして、新たに本人の嗜好として布を割いて糸を出す行動があることも知れました。支援者側のAさんに対する見え方を大きく変えた結果となりました。



【まとめ】

今回、気持ちを落ち着かせるために破衣行為に至っているのではないかという仮説に基づいて支援を考えました。Aさんにとって、破衣行為がどういった意味を持つのかわかりました。問題解決することだけが支援ではなく、支援を通してその人自身の人となりを知ることができると感じました。

私は、今回の支援でAさんの破衣行為が減ってご家族さんの負担も減り、やって良かったと思っています。また今までは、担当者が一人で問題解決に向けて考えることが多かったですが、難しい支援などは一人で考えるのではなく、チームを組んで一緒に悩み、その人にあった支援を考え実行していくのが大切なのだと感じました。

ジムインこいけのなんでも日記

置かれた場所で一歩ずつ

現在、「実践事例集」の編集作業を行っています。スタッフの貴重な実践を拝読しながら、お一人ずつやりとりをしていく、ということを重ねているのですが、ある方の文章を読んで「これはすごい実践だ…」と感じることがありました。

話はいきなり飛ぶのですが、数年前に社会福祉の大学院で学び直す機会を頂きました。これまで利用者さんやご家族に教えて頂いたことを改めて学び直すこと、そしてできるならそのことを若い方々に伝えるようなお仕事ができるようになれば、そんな思いを持っていました。ですが、途中で体調を崩し、何とか修士論文を書き上げ卒業をした、というところで終わってしまいました。そう思うことはないのだと頭ではわかっていながら、途中で終わってしまった情けないなあ…という思いはどうしても消えませんでした。

でも、本当にその学びが無駄だったのかというと、そうではないと思うのです。論文を書く中で、多くの先生方の考えを知ることができましたが、中でも坪上宏先生の「クライアントが変わる」※という援助観は、本当に大切なものだと感じました。「クライアントが変わる」とは、『まず援助者が変わることで、利用者さん(クライアント)やその方との関係への見方が変わり、その結果として利用者さんが変わっていく』という考え方だと捉えています。障害者福祉の現場においては、『利用者さんを変える』という関わりがあります。それは決していけないものではなく、例えば、利用者さんがけがをしそうな緊急事態においては、多少強引にでも利用者さんの行動を変える必要があると思います。ただ、そのような緊急的な場面であれば、すぐに利用者さんを変えようとするのではなく、まず自分自身のことを知ろう、自分が変わってみよう、という関わり方をするすることで、利用者さんとの新たな関係が見えてくることもあるのではないかと、思います。これは言葉にするとは簡単で、実際にそのように関わることはとても大変なことだと感じます。

ここで冒頭の「すごい実践」の話に戻ってくるのですが、まさに「クライアントが変わる」の援助観に基づいた実践がなされている事例があり、その方と事例のタイトルを考える中で、坪上先生の考え方についてお話をしました。「理論と実践の架け橋になる」自分のやりたいことが少してきた、と思いました。置かれた場所で自分の仕事を一歩ずつ積み重ねることが、自分のやりたいことにつながっていくこともあるのだなと改めて感じました。

(事例集は、2026年度末発行予定です、ご期待ください。)

※引用文献 坪上宏(1998)『援助関係論を目指して 坪上宏の世界』、やどかり出版、117頁

なにわの里サポータークラブに資金又は物品・労力などご支援をいただいた方々

2026年6月1日～9月30日

(敬称略・順不同)

(法人の部)

株式会社加美塗装工業所 特定非営利活動法人けいき イワタニ近畿株式会社大阪南営業所 岩崎商店
松井鐵工株式会社

(個人の部)

井上 政二 井上 明子 小島 純子 廣橋 在子 松田 直也 延田 京子 松田 紀弘 松田 ちか子
井田 博 片岡 泰彦 町野 隆 佐藤 友子 光田 一二三 渡邊 和恵 田中 仁紀子 川原 光司
川島 白鶴 佐々木 久子 端谷 克彦 神田 佳子 小畑 貴央 久保 信代 中谷 孝 北野 吉廣
濱田 由紀子 松尾 保隆 瀬戸 俊之 宮本 ひろみ 川島 伸也 村松 克己 前川 阿紀子
井形 正信 白根 勝雄 戸田 和歌 松田 恭一 四方 世津子 磯崎 尚子 中島 由香 首藤 浩二
山下 孝子 小野 雅司 藤原 昌 車谷 二三夫 小島 武郎 坪田 憲裕 野中 マサ子 武政 英雄
坪田 世津子 安井 喜誉嗣 森 克雄 肥塚 泰子

STAFF INTERVIEW

なにわの里スタッフの紹介コーナーです。インタビュー形式で、スタッフの声をお届けします！

— Kさんが障害者福祉の仕事を始めたきっかけを教えてください！

仕事をしていなくて家にいた時期があったのですが、「いっちょ腹くってやってみるか」と社員として働けるところを探してみました。が、受けては落ちという感じで困っていたところ、姉がこの仕事をしていて「うちでアルバイトからやってみないか」と声をかけてくれたのが、きっかけになります。アルバイトとして2年働いた後、社員として13年働きました。



K・Y
(入所支援2係)

成人利用者さんの支援、児童の入所施設などを経験し、療育の部署にいたころ、上司からなにわの里の実践事例発表会に行ってみないかと話があり、なにわの里との出会いはそれになると思います。そのしばらく後、僕が体調を崩して「この仕事はもう辞めようかな」と思っていたことがありました。そのとき、なにわの里で勤めていた義理の兄が「うちで働かないか」と誘ってくれて、素敵な法人さんだと思っていたし、前向きに考えていました。そのタイミングでは縁がなかったのですが、1年くらいたった時に本部長の漆嶋さんからお電話を頂き、なにわの里で働くことになりました。

— 2025年9月に入職でしたから、なにわの里に来て1年ちょっとになりますね。

実践事例発表会に行った時から、いい法人さんだなぁと思っていました。実際に入職してみても、全員が一丸となっている職場だなと感じます。例えば、先の見通しを持てずに混乱している利用者さんがおられたら、どんなふうに見通しを持ってもらうか、どういうスケジュールを組めばいいか、といったやりとりがすぐになされるので、それが自分にとっては心地いいなと思います。

利用者さんの個別支援は意識高く行っていると思いますが、一方でもう少し効率的にというか、その部署の仕事に慣れていないスタッフでもわかりやすくする工夫があってもいいのかなとも思います。具体的に言うと、スケジュールの写真カードに文字が入っていないくて、その利用者さんが文字を読めないからというのはわかるんですが、そこはスタッフ向けに文字が入っていてもいいのかなと。フロアの人などとやりとりしながら、少しずつ変えていけたらと思いますね。

— Kさんが働いていて、たいへんだなと思ったことはどんなことですか？

前の職場でのことになるのですが、一人で頑張りすぎてしまったのか、職場全体の足並みがなかなか揃わない時期があり、そのことはしんどかったですね。昔は自分でやろうとする方だったのかと思うのですが、いろんな部署で経験を積む中で、自分が…というよりも、“縁”を大切に思うようになってきたのかなと思います。仕事を辞めようと思っている時に、義兄や漆嶋さんに声をかけてもらえたのも“縁”だと思いますし、前の職場でも熱意をもった先輩方にたくさんのことを教えて頂いたのも、ほんとうにありがたい“縁”だと感じます。今のフロアの人々も、弱音を吐いても共感してくれる仲間で、ありがたいです。前の職場も含めて、自分が丁寧に育ててもらってきたことを、今度は自分が若いスタッフたちに伝えていけたらいいなと思いますね。

● 第120号 2026年10月15日発行
● 発行責任者 漆嶋真一
● 社会福祉法人 なにわの里
〒582-0025 柏原市国分西 1-3-43HOPE ハウス 202
E-mail naniwa@naniwanosato.jp
● HP <http://naniwanosato.jp>

